パラリンピック直接観戦の価値に関する一考察 ―平昌パラリンピック大会直接観戦者への質問紙調査を通して―

中村真博

1．問題の所在

2018年３月９日から18日にかけて，平昌2018パラリンピック冬季競技大会（以下「平昌パラ大会」と略す）が開催された。次回のパラリンピックは，いよいよ東京2020パラリンピック夏季競技大会（以下「東京パラ大会」と略す）であり，日本パラリンピック委員会の鳥原光憲会長をはじめ，多数の大会関係者，アスリートから「パラリンピックの成功は，各競技会場を満員の観客で盛り上げられるかにかかっている」との声が発せられている[1)]。

しかし，小林（2018）の調査によると，東京2020オリンピック・パラリンピック夏季競技大会（以下「東京オリ・パラ大会」と略す）の直接観戦（会場での生観戦）希望率は，オリンピックが32.9％であるのに対し，パラリンピックは17.6％と，オリンピックとパラリンピックでは大きな差が生じている。一方で，間接観戦（テレビやインターネット動画等での観戦）希望率は，オリンピックが65.6％，パラリンピックが57.1％と，直接観戦希望率ほどの差はみられない[2)]。

有吉（2011）によると，スポーツ観戦の本質とは，スポーツ観戦によって得られる「芸術的感動」「参加による感動」「物語による感動」「学び成長する喜び」という４つの経験価値であると述べられている[3)]。さらに齊藤（2002）は「みるスポーツ」の本質的な価値はスポーツ観戦の楽しさであり，ライブスポーツ（直接観戦）の楽しさは競技の内容や試合結果，セレモニーといったスポーツそのものを観戦することによって得られる楽しさを表す「スポーツレベル」と，観戦者同士のコミュニケーションや飲食をして騒ぐといった娯楽としての楽しさを表す「エンターテインメントレベル」に分けられるという[4)]。

上記のようなスポーツ観戦によって得られる価値があるにも関わらず，パラリンピックの直接観戦希望率は高まっていない。東京パラ大会の間接観戦に関しては回答者の半

数以上が希望するにも関わらず，直接観戦に関しては低い希望率となっている現状は先述したが，有吉（2011）が指摘する４つの経験価値，齊藤（2002）が指摘するライブスポーツ（直接観戦）の楽しさを享受するためには，直接観戦，間接観戦をともに経験することが望ましいだろう。そこで本研究では，希望率の低い直接観戦の価値に関して，平昌パラ大会直接観戦者への質問紙調査を通じて考察したい。

２．先行研究の検討及び本研究の目的

日本におけるパラリンピック直接観戦に関するこれまでの研究は，木塚（1998），難波（2009），野口（2012），齊藤（2017），小山（2017）などによって行われているが，いずれも著者自身が直接観戦し，現地の状況や直接観戦の感想を述べる「観戦記」や「観戦報告」となっており，定量的・体系的な研究は行われていない[5)6)7)8)9)]。一方で，パラリンピックのメディア観戦（間接観戦）に関する論考として，渡（2010）は表象実践と儀礼的関心の観点から論じ，「スポーツ」として一元化し意味づけるパラリンピックのメディア表象には様々な点で不整合が見て取れると指摘し，重要なことは「スポーツ」という文脈の枠内のみで問いを発し，答えを導くのではなく，社会に埋め込まれた社会的事象の一つであるという想像力を発揮することであると論じている[10)]。この論考の中心となっているメディアによるパラリンピックの「スポーツ化」という表象実践，「儀礼的関心」の徹底化に関して，2013年の東京オリ・パラ大会開催決定以降，本文中でも触れられている車いすバスケットボール全国大会の観客数は確実に増加している。さらには障がい者スポーツの大会で有料席が設けられたり，テレビ放送等では，これまでの，ある種の型にはまった「物語」的な放送のみならず，アスリートのドキュメンタリーや科学的にアスリートの身体を分析する放送など，多様な取り上げられ方がみられるように変化してきている。依然として渡（2010）が指摘する「オリンピックと別に開催されるのは何故なのか」といった疑問はみられ，「儀礼的関心」が残っている面もあるが，上記のような変化も生じており，以前と比較し，障がい者スポーツを多様な観点から捉えようとする動きもみられるのではなかろうか。

一方で，いわゆる健常者スポーツの直接観戦に関する研究としては，齊藤（2013）は競技スポーツにおける観戦行動の構造的側面に注目し，観るスポーツの文化価値を享受・創造する観戦行動の概念枠組みを理論的に構築することを目的とした研究を行った。スポーツに対する知識や観察・解釈力，評価・評論力から構成される「観戦能力」を利用して，「観戦価値」から観戦者の内面に「有効価値」を産出させる創造的な意味経験の行為である「観戦行動」は，「観戦価値」，「観戦能力」および「有効価値」によっ

て構成され，その「観戦価値」には，「内在的観戦価値」と「外在的観戦価値」があることを明らかにした[11]。また，神野ら（2008）や深田（2011）などによって定量的・定性的にも調査は行われており，地域や競技特有の観戦者特性が明らかにされている[12)13]。

このようにスポーツの直接観戦に関する研究は行われているが，パラリンピックの直接観戦に関する研究は体系的に行われているとは言いがたい。渡（2010）は，パラリンピックはもともと福祉の延長として捉えられていたが，現在はパラリンピックの表象の「スポーツ」への一元化が図られており，「障害者－健常者」の階層的な関係を再生産してしまうことに繋がる可能性があると指摘している[14]。「スポーツ」への一元化に関しての疑問は先述した通りだが，この指摘のように，パラリンピックとオリンピックの競技性の高低を如実に表してしまい，パラリンピックを取り巻く社会的なものへの想像力が遮断されてしまっている可能性は否定できない。そのため，パラリンピックの直接観戦は健常者スポーツの直接観戦とは異なる視点から捉える必要もあると考えられ，パラリンピック特有の構造から直接観戦に関して研究する必要があるとも考えられる。

そこで本研究では，これまで定量的な調査が行われておらず，健常者スポーツと比較して体系的な研究が行われていないパラリンピック直接観戦において，観戦者が観戦に至るまでに有する「観戦能力」と，観戦者が直接観戦によって見出す「観戦価値」の関係性を明らかにすることを目的とする。

3．分析視座と作業仮説の提示

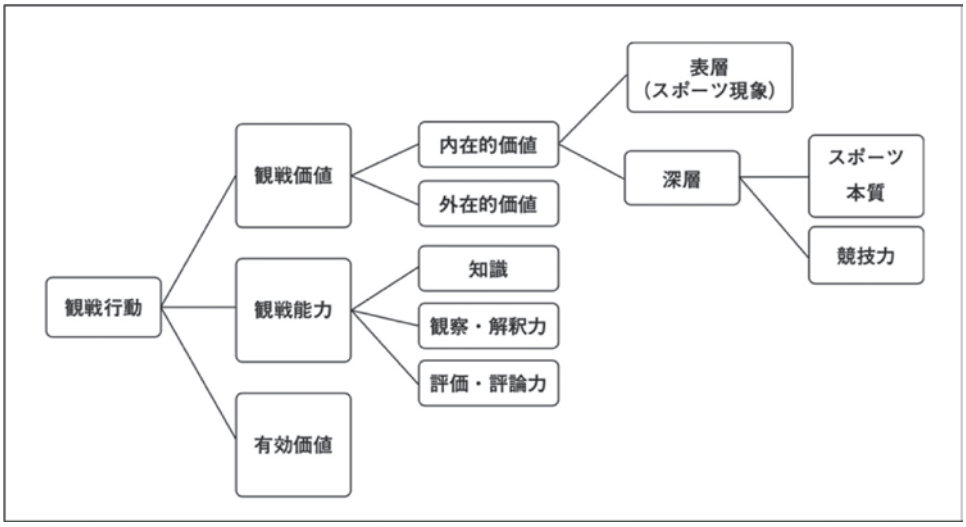
ここではパラリンピック直接観戦の価値について，先述した健常者スポーツ観戦行動の概念枠組みをもとに，パラリンピック特有の要因を踏まえ検討し，本研究における作業仮説を提示する。

齊藤（2013）によると，「観戦価値」には，「内在的観戦価値」と「外在的観戦価値」があり，観戦者は，それぞれの価値について観戦者が有する「観戦能力」を用いて観戦し，自己のスポーツ生活にとって意味あるものとして「有効価値」を創出している。さらに，「内在的観戦価値」は，表層としての「スポーツ現象」，およびその深層の「スポーツ本質」とプレイヤーの「競技力」という構成契機からなることを明らかにしている[15]。（図１）

この観戦行動の概念枠組みをパラリンピック直接観戦に即して考えてみると，パラリンピック特有の点は，「観戦能力」，「観戦価値」，「有効価値」の全ての概念に見出すことができるのではなかろうか。

まず，「観戦能力」に関しては，知識，観察・解釈力，評価・評論力から構成され[16]，

図１．観戦行動の概念枠組み



出典：齊藤隆志，2013,「観戦行動の概念枠組みの検討―観るスポーツの文化価値創造マネジメントを視野に入れて―」,『日本女子体育大学紀要』，43，124.

パラリンピックにおいては，障がいや競技特有の用具，ルールなどに関する知識や，それらの知識を用いた観察力，さらに，それらを解釈し，自分なりに評価することが含まれる。

次に「観戦価値」を構成する「内在的観戦価値」と「外在的観戦価値」に関して,「内在的観戦価値」は,「スポーツ現象」,「スポーツ本質」,「プレーヤーの競技力」から構成され[17]，パラリンピック競技という「スポーツ現象」とパラリンピアンの競技力や人格などを,「観戦能力」を用いることによってパラリンピック競技という「スポーツ現象」の表層のみならず，深層にあるパラリンピックの価値（国際パラリンピック委員会は「勇気」「強い意志」「インスピレーション」「公平」と定めている）などの「スポーツの本質」を理解することである。一方,「外在的観戦価値」は，スポーツの本質とは直接関係ないが，観戦行動を通してスポーツをめぐる社会認識や歴史的認識を見いだす重要価値であり[18]，パラリンピックを通じて共生社会について考えたり，過去の障がい者が置かれていた状況について思い返したりすることである。

最後に「有効価値」に関しては，観戦者が「観戦能力」を用いて「内在的観戦価値」,「外在的観戦価値」という「観戦価値」を，自身にとって意味のある価値として内面化し，意味形成される価値のことであり[19]，パラリンピックの価値を自身の価値として受け入れることである。

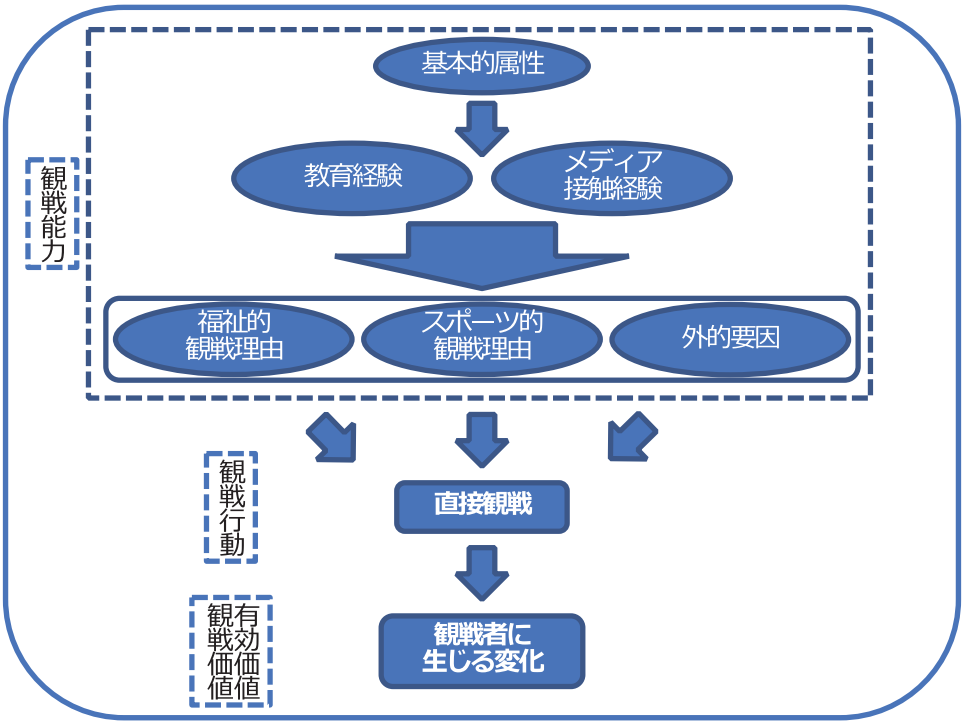
以上の分析視座をもとに,「メディア接触経験」や「障がい理解教育経験」，それらに基づく「大会観戦経験」という，個人が有するパラリンピックに関する「観戦能力」が,

パラリンピック直接観戦という「観戦行動」を通じて，「会場の雰囲気」や，「ルールや戦術を理解」しパラリンピックの価値を理解することができたかどうか，「障がい理解の促進」につながったかどうかなどといった「観戦価値」や「東京パラ大会観戦意欲」の向上，「東京パラ大会への期待」といった「有効価値」を産出するという作業仮説を設定する。

4．調査設計及び調査概要

質問紙は先述した作業仮説に基づき作成した（文末資料）。年齢や居住地といった基本的属性，手話や点字をはじめとする障がい理解教育経験（以下「教育経験」と略す），テレビやSNSなどのメディアを通じた間接観戦経験によって「観戦能力」が身につき，障がい者スポーツを福祉的に捉えるか，スポーツとして捉えるかという観戦理由，もしくは周囲の人に勧められたといった外的要因によって「観戦行動」が生じる。実際にパラリンピックを直接観戦することにより，観戦者が高い観戦満足度や障がい者スポーツ観戦意欲の向上などといった「観戦価値」を見出し，「観戦価値」が内面化されることによって「有効価値」が観戦者にもたらされる。（図２）

図２．調査設計図（筆者作成）



調査概要は以下の通りである。

（1）調査対象

調査対象は，平昌パラ大会の各競技会場及び平昌オリンピックプラザ，江陵オリンピックパーク内で有意に抽出した観戦者である。

（2）調査時期と方法

本調査は2018年３月16日から18日にかけて行った。調査方法は，日本語・英語・韓国語で同一内容の質問紙を作成し，日本人には日本語で，韓国人にはスマートフォンの翻訳機能を使用し韓国語で，その他の国籍の人には英語で調査の概要を説明し，同意を得られた場合，質問紙を配布し，123部の有効回答を得ることができた。

（3）調査項目の構造及び分析方法

調査項目の構造は，調査対象者の１．基本的属性（「観戦能力」），２．平昌パラ大会直接観戦競技（「観戦行動」），３．同大会メディア接触経験（「観戦能力」），４．同大会競技観戦理由，５．同大会直接観戦による影響に関する項目（「観戦価値」），６．東京パラ大会に関する項目（「有効価値」），７．スペシャルオリンピックス・デフリンピック認知度（「観戦能力」），８．これまでの教育経験（「観戦能力」），９．これまでのオリンピック・パラリンピック直接観戦経験（「観戦能力」）である。分析方法は，調査項目における「観戦能力」と「観戦価値」,「有効価値」についてクロス集計を実施した。なお，結果数値（％）は，表章単位未満を四捨五入してあるので，内訳の合計が計に一致しないこともある。

（4）サンプル特性

サンプル特性は以下の図３～６に示す。

図３．回答者の年齢

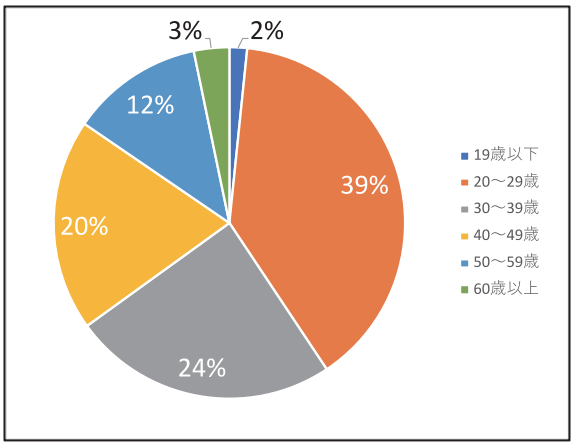


図４．回答者の性別

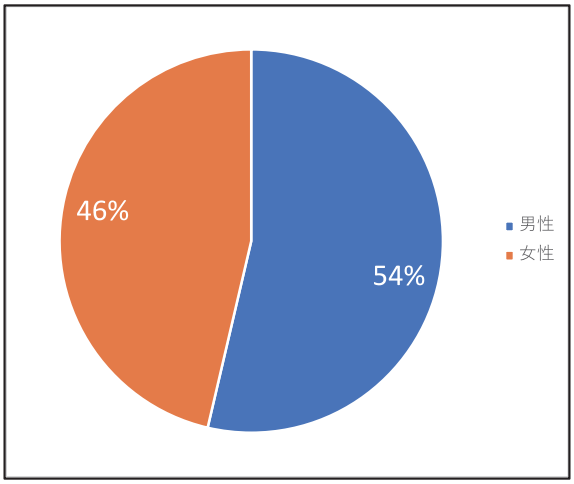


図５．回答者の居住地

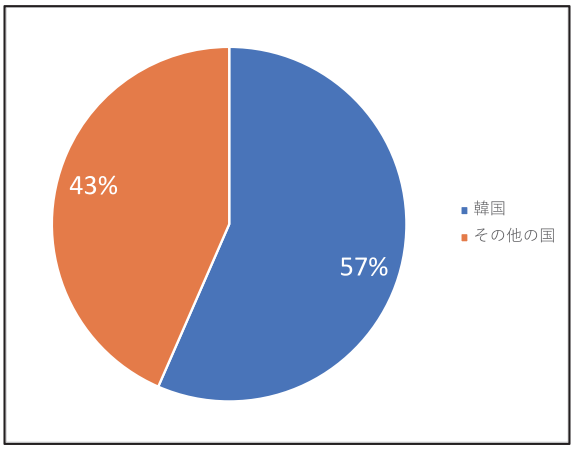
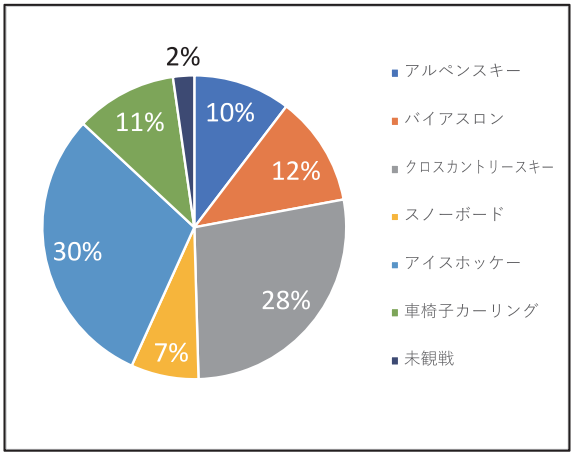


図６．回答者の平昌パラ大会直接観戦競技



（５）「観戦価値」・「有効価値」に関する単純集計結果

以下では，調査項目の構造で分類した「観戦価値」・「有効価値」に関する単純集計結果を示す。その際，①ポジティブ群（「大変満足した」「やや満足した」／「非常にそう思う」「ややそう思う」），②どちらともいえない，③ネガティブ群（「やや不満」「非常に不満」／「あまりそう思わない」「全くそう思わない」）の３つの群を設定する。

観戦満足度に関しては，ポジティブ群：94%，どちらともいえない：４%，ネガティブ群：２%であった。会場の一体感に関しては，ポジティブ群：90%，どちらともいえない：８%，ネガティブ群：２%であった。ルールの理解に関しては，ポジティブ群：75%，どちらともいえない：11%，ネガティブ群：14%であった。障がい者スポーツ観戦意欲の向上に関しては，ポジティブ群：88%，どちらともいえない：７%，ネガティ

ブ群：５％であった。障がい理解の促進に関しては，ポジティブ群：93%，どちらともいえない：１％，ネガティブ群：６％であった。東京パラ大会観戦意欲に関しては，会場に観に行きたい：57%，テレビで観たい：23%，まだ分からない：19%，観たいとは思わない：１％であった。

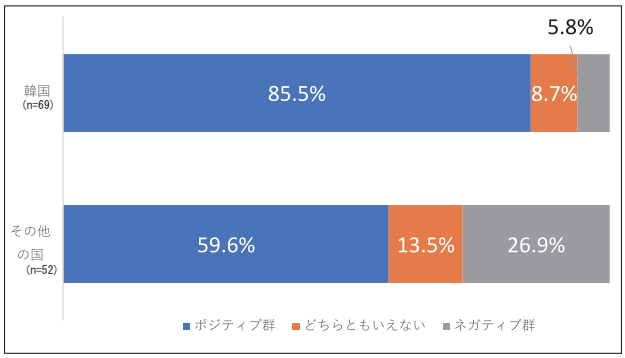
５．調査結果と考察

（１）基本的属性と「観戦価値」･「有効価値」の関係性

まず基本的属性における年齢と「観戦価値」･「有効価値」の関係性については，ルールの理解，東京パラ大会に期待することとして「国際友好関係の促進」との間に有意な差がみられた。また，性別と「観戦価値」･「有効価値」の関係性については，東京パラ大会に期待することとして「報道量の増加」との間に有意な差がみられた。次に，居住地と「観戦価値」･「有効価値」におけるルールの理解に関するクロス集計を行い，その結果をまとめたものが図７である。

その結果，韓国在住の回答者は韓国以外の国に居住している回答者よりも，ルールを理解している割合が高いことが明らかになった。この結果から，会場内は主催国の言語（本調査では韓国語）でのアナウンスとなることが多く，特有のルールが存在するパラリンピック競技は，その言語を母語としない観戦者にとって，ルールの理解に関して困難が生じる可能性が示唆される。そのため，開催国以外の観戦者の「観戦価値」･「有効価値」を高めるためには，複数言語の提供や，直接観戦以前の観戦者自身の観戦能力を高める必要があると考えられる。

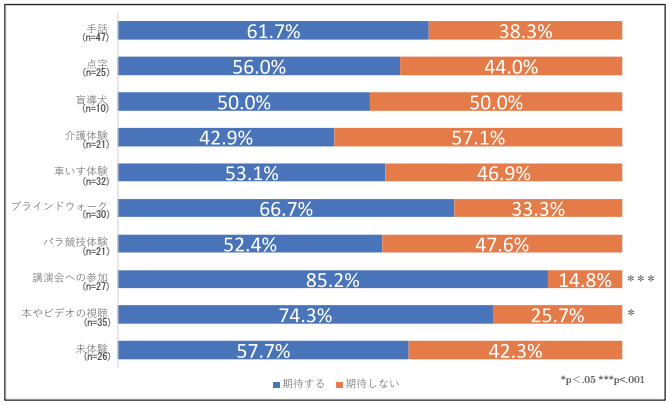
図７．居住地とルールの理解ｐ＜.005



（2）障がい理解教育経験と「観戦価値」・「有効価値」の関係性

次に平昌パラ大会直接観戦前の教育経験と「観戦価値」・「有効価値」のクロス集計を行った結果，教育経験数と「観戦価値」との間に有意な差はみられなかったが，一部の教育経験と東京パラ大会に期待することとして「パラリンピックの価値の伝播」との間に有意な差がみられ，その結果をまとめたものが図８である。

図８．教育経験とパラリンピックの価値の伝播（複数回答可）



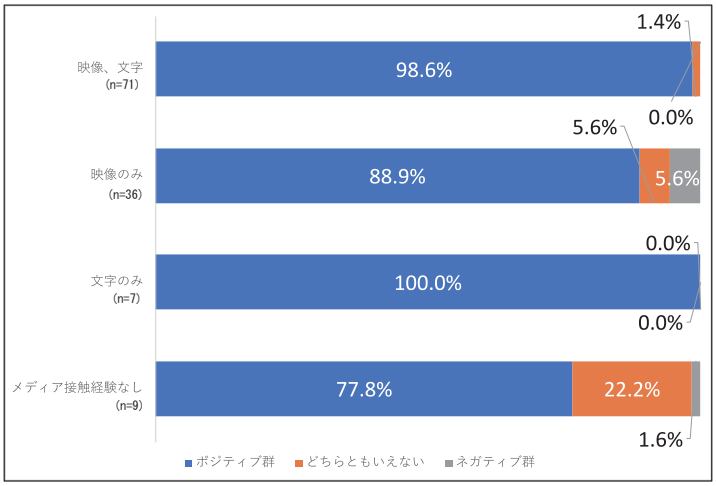
その結果，「障がいのある方や関わりのある方の講演会への参加（図８では講演会への参加と記載）」「障がい理解を深めるための本やビデオの視聴（図８では本やビデオの視聴と記載）」の経験がある人ほど，東京パラ大会に期待することとして「パラリンピックの価値の伝播」と回答する人の割合が高いことが明らかになった。この結果から，障がい者と同じような境遇を実際に経験し，自身の身体で障がいについて理解するよりも，障がい者の声を直接聞いたり，体系的にまとまった本やビデオを視聴する方が，観戦者がパラリンピックの価値を「有効価値」として内面化する際に影響を与えることが示唆される。

（3）メディア接触状況と「観戦価値」・「有効価値」の関係性

次に平昌パラ大会直接観戦前のメディア別（映像媒体，文字媒体）の間接観戦経験と観戦満足度のクロス集計を行い，その結果をまとめたものが図９である。

その結果，メディア接触経験の有無によって，観戦満足度に影響が生じることが明らかになった。さらには，映像媒体と文字媒体のどちらも経験し，少しでも多くの「観戦能力」を身につけている人ほど，パラリンピック直接観戦に満足することも明らかになった。この結果から，パラリンピック直接観戦者の観戦満足度という「観戦価値」を

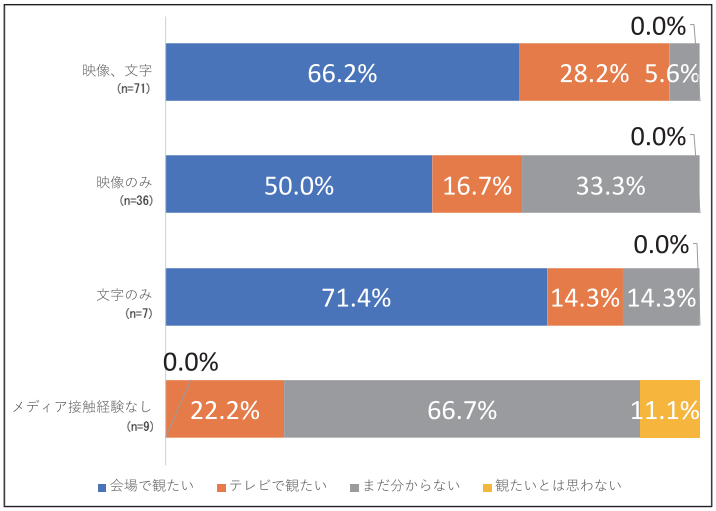
図９．メディア接触経験と観戦満足度ｐ＜.05



高めるためには，直接観戦前に様々なメディアを通した間接観戦を行い，観戦者の「観戦能力」を向上させておくことが望ましいと考えられる。

また，メディア別（映像媒体，文字媒体）の間接観戦経験と東京パラ大会観戦意欲のクロス集計を行い，その結果をまとめたものが図10である。

図10．メディア接触経験と東京パラ大会観戦意欲ｐ＜.001



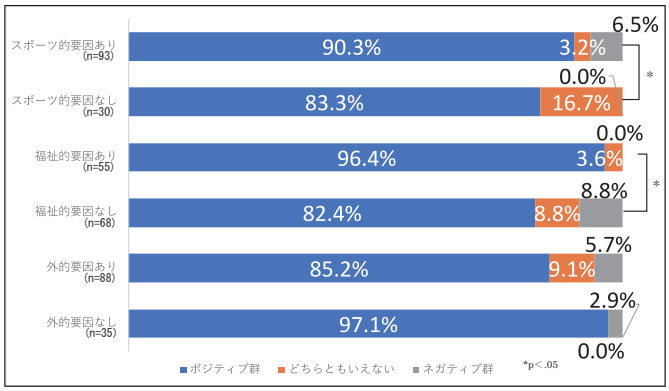
その結果，メディア接触経験の有無によって，東京パラ大会観戦意欲という，直接観戦者が見出す「有効価値」に差が生じることが明らかになった。回答者数に差があるものの，メディア接触経験者と比較して，メディア接触未経験者は直接観戦，間接観戦ともに東京パラ大会観戦意欲が低い。メディア接触経験者は，メディア媒体を問わず，「観

たいとは思わない」というネガティブな回答をした人は存在しないため，直接観戦者の増加には，直前のパラ大会の直接観戦者が増加することと，その直接観戦者のメディア接触経験が豊富であることが影響すると考えられる。

（4）観戦理由と「観戦価値」・「有効価値」の関係性

次に平昌パラ大会の直接観戦理由を「スポーツ的要因」（「スポーツ競技として面白いから」「注目している選手がいるから」「アスリートが活躍する姿を観たいから」「障がい者スポーツに興味があるから」「自分の障がいが競技の対象となっているから」「パラリンピックに出たいから」「パラリンピック以外の障がい者スポーツ大会に出たいから」），「福祉的要因」（「障がい者が努力する姿を観たいから」「障がい者に対する理解が広がると思ったから」「障がい者に関わるボランティアに興味があるから」），「外的要因」（「オリンピックが盛り上がっていたから」「パラリンピックがニュースや記事で話題になっていたから」「周囲の人に勧められた・誘われたから」「SNS でみたから」「自国で開催しているから」）の３つの要因に分け，障がい者スポーツ観戦意欲の向上とのクロス集計を行い，その結果をまとめたものが図11である。

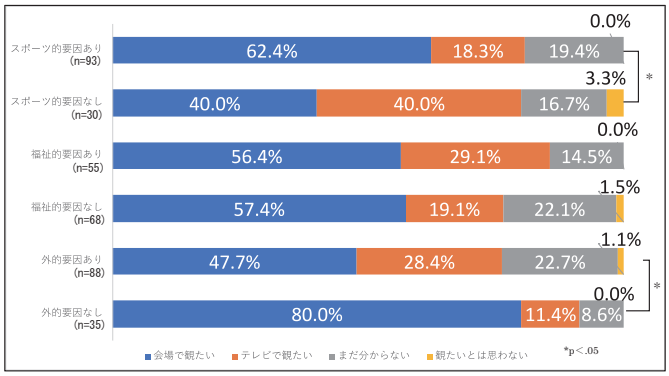
図11．直接観戦理由と障がい者スポーツ観戦意欲の向上



その結果，直接観戦理由はスポーツ的要因，福祉的要因いずれの場合も，障がい者スポーツ観戦意欲の向上との間に有意な差がみられた。一方で，周囲の人の勧めや自国開催であるからといった外的要因による直接観戦者は，スポーツ的要因，福祉的要因による直接観戦者と比較し，障がい者スポーツ観戦意欲の向上にポジティブな回答者の割合が少ない結果となった。この結果から，外的要因によって直接観戦を行うのではなく，直接観戦者が事前にパラリンピックに関して，その人なりのイメージや評価をし，直接観戦を行うことにより，障がい者スポーツ観戦意欲の向上という「有効価値」を見出しやすくなることが示唆された。

また，先述した直接観戦理由と東京パラ大会観戦意欲のクロス集計を行い，その結果をまとめたものが図12である。

図12．直接観戦理由と東京パラ大会観戦意欲



その結果，スポーツ的要因の有無と東京パラ大会観戦意欲，外的要因の有無と東京パラ大会観戦意欲の間に有意な差がみられた。この結果から，スポーツ的要因によって直接観戦した観戦者は，スポーツ的要因のない観戦者よりも東京パラ大会を直接観戦したいと思う人の割合が高く，直接観戦したことにより，パラリンピックに対する「有効価値」を見出していることが示唆される。一方で，外的要因によって直接観戦した観戦者は，障がい者スポーツを見るために観戦したというよりは，「お祭り気分」で観戦した可能性があり，その他の観戦理由と比較し，パラリンピックに対する「有効価値」は低い結果となったと考えられる。

（5）過去の大会観戦経験と「観戦価値」・「有効価値」の関係性

最後に平昌パラ大会前のオリンピック・パラリンピック直接観戦経験と観戦満足度，観戦意欲の向上とのクロス集計を行い，その結果をまとめたものが図13，図14，図15である。

その結果，オリンピック・パラリンピックの観戦経験がない人ほど観戦満足度が高く，さらには障がい者スポーツ観戦意欲が向上することが明らかになった。これらの結果から，観戦経験がなく，「観戦能力」の低い観戦者ほど，観戦意欲の向上率が高いことが示唆される。一方で，オリンピック・パラリンピックの観戦経験がある人は，平昌パラ大会前から観戦意欲が高く，さらには自身が直接観戦している前の大会と比較するため，未経験者と比較し観戦意欲が向上しにくいことが考えられる。

また，平昌オリ大会の直接観戦経験の有無とルールの理解の間にも優位な差がみられた。この結果により，オリンピックを直接観戦した人ほど，パラリンピック競技のルー

図13.　過去のオリパラ直接観戦経験と観戦満足度 p ＜ .05

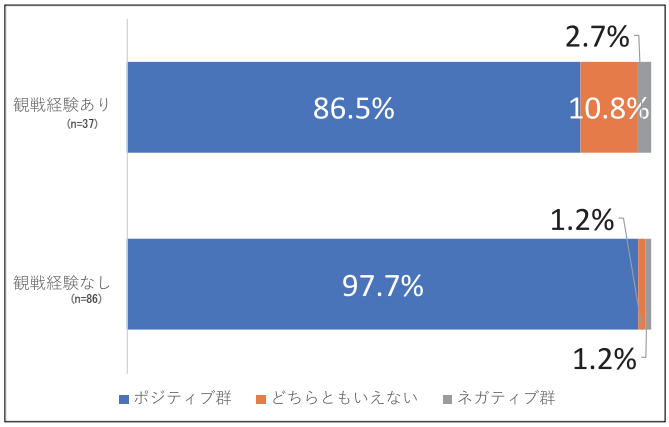


図14. 過去のパラリンピック直接観戦経験と障がい者スポーツ観戦意欲の向上 p ＜ .01

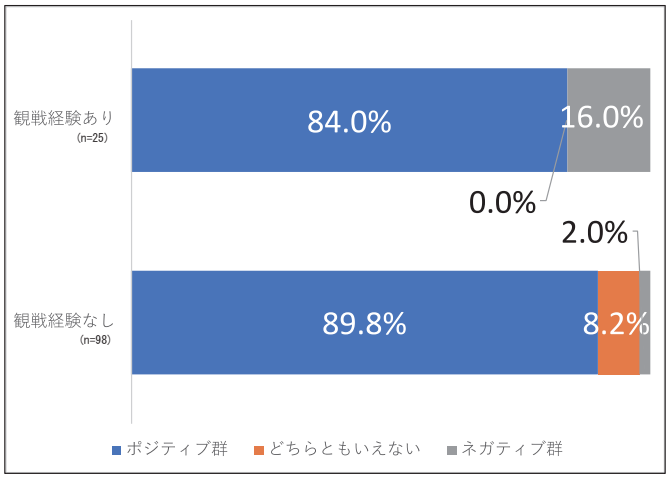
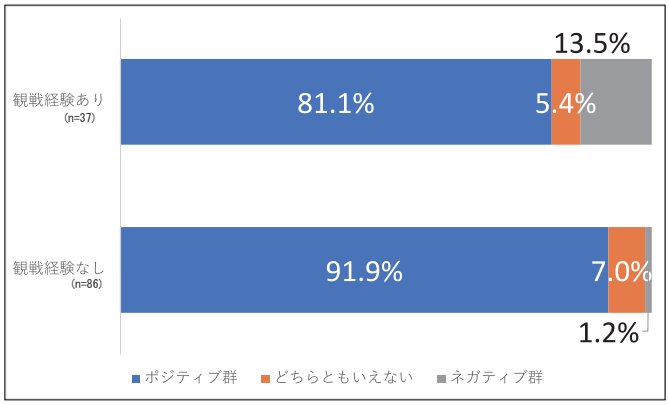


図15.　過去のオリパラ直接観戦経験と障がい者スポーツ観戦意欲の向上 p ＜ .05



ルの理解をしやすいことが示唆されるが，直接観戦者がパラリンピックもオリンピックと同様に捉えている可能性もあり，実際にどの程度パラリンピック特有のルールを理解できているかには疑問が残る。

6．本研究のまとめと今後の課題

本研究ではパラリンピックの直接観戦に関して，「メディア接触経験」や「教育経験」，それらに基づく「大会観戦経験」という，個人が有するパラリンピックに関する「観戦能力」が，パラリンピック直接観戦という「観戦行動」を通じて，「会場の雰囲気」や，「ルールや戦術を理解」しパラリンピックの価値を理解することができたかどうか，「障がい理解の促進」につながったかどうかなどといった「観戦価値」や「東京パラ大会観戦意欲」の向上，「東京パラ大会への期待」といった「有効価値」を産出するという作業仮説について検討を行った。

調査結果から，回答者の94％が観戦に満足し，88％が障がい者スポーツ観戦意欲が向上したと回答しており，パラリンピック直接観戦は観戦者に高い「観戦価値」・「有効価値」をもたらすことが明らかになった。提示した作業仮説に基づき，「観戦能力」が「観戦行動」を通じ，「観戦価値」や「有効価値」を産出したかどうかを検証したところ，まず教育経験という「観戦能力」に関しては，「障がいのある方や関わりのある方の講演会への参加」や「障がい理解を深めるための本やビデオの視聴」が「パラリンピックの価値の伝播」を期待するという「有効価値」を産出しやすいことが明らかになった。次にメディア接触経験という「観戦能力」に関しては，メディア媒体を問わず，メディア接触経験を有することにより観戦満足度，東京パラ大会観戦意欲という「観戦価値」・「有効価値」を産出しやすいことが明らかになった。また，教育経験，メディア接触経験という「観戦能力」から影響を受けた観戦理由に関しては，スポーツ的・福祉的要因いずれも，障がい者スポーツ観戦意欲の向上，東京パラ大会観戦意欲という「有効価値」を産出し，外的要因ではなく，自らの「観戦能力」を要因として「観戦行動」を実行することで，「有効価値」が高くなることが明らかになった。最後にオリンピック・パラリンピック観戦経験という「観戦能力」に関しては，観戦経験のない人ほど観戦満足度や障がい者スポーツ観戦意欲の向上という「観戦価値」・「有効価値」を産出しやすく，経験数という「観戦能力」に関しては，経験数が少なく「観戦能力」の低い観戦者ほど「観戦価値」・「有効価値」が高くなりやすいことが明らかになった。しかし，この点に関しては平昌パラ大会観戦前の観戦意欲にかなりの差が生じており，経験数が多く「観戦能力」の高い観戦者は平昌パラ大会観戦前から観戦意欲がかなり高かったことも考え

られる。以上の結果から，それぞれの「観戦能力」がいずれかの「観戦価値」・「有効価値」を産出しており，作業仮説に関しては一定程度支持されたものといえよう。

今回の研究は，これまで定量的な研究が行われていないパラリンピック直接観戦に関する足がかりとなる研究であり，調査期間の短さや，冬季パラリンピックという気候の問題があったため，回答者数が少なく，観戦競技に関しても偏りがあるものとなってしまっている。そのため，パラリンピックという２年に１度の大会のみならず，障がい者スポーツ大会に関しても定量的な直接観戦データの蓄積が必要である。また，一般スポーツやメディアを通じた間接観戦との比較を通じた，パラリンピック直接観戦の体系的な分析視点を構築することも必要である。以上を今後の課題としたい。

引用参考文献

１）読売新聞，「論点 共生社会育むパラスポーツ 鳥原光憲氏」，2017年12月26日.

２）小林尚平，2018，「リオ2016大会後におけるパラリンピックに関する認知と関心」，『パラリンピック研究会紀要』，８，49-50.

３）有吉忠一，2011，「第12章　スポーツ観戦マーケットの構造―経験価値形成戦略の分析―」，伊多波良雄，横山勝彦，八木匡，伊吹勇亮編『スポーツの経済と政策』，晃洋書房，198-203.

４）齊藤隆志，2002，「『みるスポーツ』の経営」，八代勉，中村平編『体育・スポーツ経営学講義』，大修館書店，184-185.

５）木塚朝博，1998，「パラリンピック観戦記」，『バイオメカニズム学会誌』，22（２），88-89.

６）難波真理，2009，「2008北京パラリンピック観戦」，『近畿大学健康スポーツ教育センター研究紀要』，８（１），33-35.

７）野口智博，2012，「2012ロンドンパラリンピック観戦報告」，『桜門体育学研究』，47（１），72-78.

８）齊藤まゆみ，2017，「リオパラリンピック観戦報告」，『筑波大学体育系紀要』，40，71-74.

９）小山良隆，2017，「リオパラリンピックレポート―東京パラリンピックへの道　リオデジャネイロパラリンピック観戦レポート―」，『総合リハビリテーション』，45（１），71-73.

10）渡正，2010，「第10章　パラリンピックの表象実践と儀礼的関心」，橋本純一編『スポーツ観戦学―熱狂のステージの構造と意味―』，世界思想社，230-251.

11）齊藤隆志，2013，「観戦行動の概念枠組みの検討―観るスポーツの文化価値創造マネジメントを視野に入れて―」，『日本女子体育大学紀要』，43，117-127.

12）神野賢治，田島良輝，岡野鉱二，2008，「地域プロサッカークラブの観戦者に関する調査研究―ツエーゲン金沢のホームゲーム観戦者を事例として―」，『金沢星稜大学人間科学研究』，２（１），35-41.

13）深田忠徳，2011，「スタジアムにおけるサポーターの観戦享受に関する研究―アビスパ福岡サポーターにおける『相互作用』を事例に―」，『スポーツ社会学研究』，19（２），49-60.

14）渡正，前掲書.

15）齊藤隆志，2013，前掲書.

16）同上．122.

17）同上．120-121.

18）同上．121.

19）同上．120，124.

文末資料

平昌パラリンピック観戦に関するアンケート調査

日本財団パラリンピックサポートセンター
パラリンピック研究会

Q1. あなたの年齢について、当てはまるもの一つにチェックして下さい。
□①19 歳以下　□②20～29 歳　□③30～39 歳　□④40～49 歳　□⑤50～59 歳　□⑥60 歳以上

Q2. あなたの性別について、当てはまるもの一つにチェックして下さい。
□①男性　□②女性　□③その他・答えたくない

Q3. あなたがお住いの国・地域を教えてください。
□①韓国　□②その他（国名：　　）

Q4. あなたが平昌パラリンピック会場で観戦した（観戦する予定の）競技すべてにチェックして下さい。
□①アルペンスキー　□②バイアスロン　□③クロスカントリースキー　□④スノーボード
□⑤アイスホッケー　□⑥車椅子カーリング　□⑦競技は観ていない（観ない）

Q5. あなたは、会場での観戦の他に、平昌パラリンピックをどのようにご覧になりましたか。
当てはまるものすべてにチェックして下さい。
□①テレビ中継　□②テレビのニュース番組や選手・競技の特集番組　□③CM（動画サイト等を含む）
□④新聞の大会結果　□⑤新聞の選手・競技の特集記事　□⑥動画サイトの大会中継
□⑦ニュースサイト　□⑧インターネットの大会結果や選手・競技の特集記事
□⑨SNS　□⑩その他（　　）　□⑪会場以外で観ていない

Q6. あなたが平昌パラリンピックを会場で観戦した（観戦する）理由について
当てはまるものすべてにチェックして下さい。
□①スポーツ競技として面白いから　□②注目している選手がいるから（名前：　　）
□③オリンピックが盛り上がっていたから
□④パラリンピックがニュースや記事で話題になっていたから
□⑤周囲の人に勧められた・誘われたから　□⑥SNS でみたから
□⑦障がい者が努力する姿を観たいから　□⑧アスリートが活躍する姿を観たいから
□⑨障がい者スポーツに興味があるから　□⑩自分の障がいが競技の対象となっているから
□⑪パラリンピックに出たいから　□⑫パラリンピック以外の障がい者スポーツ大会に出たいから
□⑬障がい者に対する理解が広がると思ったから　□⑭障がい者に関わるボランティアに興味があるから
□⑮自国で開催しているから
□⑯その他（理由：　　）　□⑰特に理由はない

Q7. 以下の質問についてそれぞれ、あなたの考えに当てはまるもの一つにチェックして下さい。
Q7-1. 平昌パラリンピックの観戦満足度。
□①大変満足した　□②やや満足した　□③どちらともいえない　□④やや不満　□⑤非常に不満
（その理由：　　）

Q7-2. 平昌パラリンピックの会場は熱狂や一体感に包まれていた。
□①非常にそう思う　□②ややそう思う　□③どちらともいえない　□④あまりそう思わない
□⑤全くそう思わない

Q7-3. ルールや戦術をよく理解しながら観戦することができた。
□①非常にそう思う　□②ややそう思う　□③どちらともいえない　□④あまりそう思わない
□⑤全くそう思わない

Q7-4. 平昌パラリンピックを会場で観戦して、もっと障がい者スポーツを観たくなった。
□①非常にそう思う　□②ややそう思う　□③どちらともいえない　□④あまりそう思わない
□⑤全くそう思わない

Q7-5. 平昌パラリンピックの会場での観戦は、障がいについての理解を促進させると思った。
□①非常にそう思う　□②ややそう思う　□③どちらともいえない　□④あまりそう思わない
□⑤全くそう思わない

Q8. 2020 年の東京パラリンピックも観に行きたいと思いますか。
当てはまるもの一つにチェックして下さい。
□①会場に観に行きたい　□②テレビで観たい　□③まだ分からない　□④観たいとは思わない

Q9. 2020 年の東京パラリンピックに期待していることは何ですか。
当てはまるものすべてにチェックして下さい。
□①自国選手・チームの活躍　□②オリンピックと同じくらいパラリンピックが盛り上がること
□③パラリンピックの価値の伝播（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）
□④科学技術イノベーションの促進　□⑤報道量の増加　□⑥東日本大震災などの被災地の復興促進
□⑦高いホスピタリティ　□⑧日本文化の発信　□⑨国際友好関係の促進
□⑩経済効果の国際的波及　□⑪その他（　　）
□⑫特にない

Q10. あなたは下記 2 つの大会を知っていますか？当てはまるもの一つにチェックして下さい。
Q10-1.「スペシャルオリンピックス」
□①内容を知っている　□②この名称を見たり聞いたりしたことがある程度　□③知らない
Q10-2.「デフリンピック」
□①内容を知っている　□②この名称を見たり聞いたりしたことがある程度　□③知らない

Q11. あなたはこれまでに学校教育またはそれ以外の場所において、以下のような障がい理解に関する
教育を体験したことがありますか？体験したことがあるものすべてにチェックして下さい。
□①手話体験　□②点字についての学習　□③盲導犬についての学習　□④介護等体験
□⑤車いす体験　□⑥ブラインドウォーク（アイマスクをしての歩行）体験
□⑦パラリンピック対象競技を実際に体験　□⑧障がいのある方や関わりのある方の講演会への参加
□⑨障がい理解を深めるための本やビデオの視聴　□⑩その他（　　）
□⑪体験したことがない

Q12. 平昌パラリンピック以外に、あなたがこれまで会場で観戦した大会について、
当てはまるものすべてにチェックして下さい。
□①平昌オリンピック　□②リオパラリンピック　□③リオオリンピック
□④その他のオリンピック（都市名：　　）　□⑤その他のパラリンピック（都市名：　　）
□⑥デフリンピック（都市名：　　）　□⑦スペシャルオリンピックス（都市名：　　）
□⑧これらの大会は観戦していない

以上でアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。

Study concerning the Value of Directly Watching the Paralympic Games — Based on a Questionnaire Survey of Spectators at the PyeongChang 2018 Paralympic Games —

Masahiro NAKAMURA

Among persons who wish to attend the 2020 Tokyo Olympic and Paralympic Games and view the games firsthand ("view directly"), there is a significant difference between those who wish to view the Olympic Games and those who wish to view the Paralympic Games. Despite the high rate of persons who hope to watch the Paralympics via television or other means ("view indirectly"), the rate of those who wish to attend the Paralympics and view the games directly is low at present.

In Japan, studies have been conducted concerning the direct viewing of sports but there has been little systematic study concerning the direct viewing of the Paralympic games to date. Therefore, the objective of this study is to clarify the relationship between the "viewing capability" that spectators have before actually viewing the games and the "viewing value" that spectators discover by directly viewing the games, in this case, the direct viewing of the Paralympics, an area where, unlike so-called able-bodied sports, no quantitative studies have been conducted to date, and no systematic studies have been conducted.

This study investigated a working hypothesis regarding the direct viewing of the Paralympics in terms of whether the "viewing capability" individuals have of the Paralympics, that is, their "viewing experience of the games" based on "media contact experience" and "educational experience" enabled them to understand the "atmosphere at the venues" and "the rules and tactics" of the sports matches and to grasp the essence of the Paralympics through the "viewing behavior" of directly viewing the Paralympics. The hypothesis also investigated whether such "viewing capability" enhanced "viewing value," leading to the "promotion of an understanding of disabilities," and whether it produced "effective value" in terms of enhancement in "desire to view the Tokyo Paralympic Games" and "expectations of the Tokyo

Paralympic Games."

Results of a questionnaire survey targeting spectators who directly viewed the PyeongChang Paralympic Games revealed that direct viewing of the Paralympics generated high "viewing value" and "effective value" for spectators. After verifying whether "viewing capability" produced "viewing value" and "effective value" through "viewing behavior" based on the working hypotheses presented, the study first clarified that "viewing capability" derived from educational experience produced "effective value" in terms of expectations for the "spread of the values of the Paralympics" through the "participation at lecture meetings conducted by persons with disabilities or persons involved in the area of disabilities in some way" and the "reading of books or viewing videos to deepen understanding of disabilities." Next, the study clearly indicated that "viewing capability" derived from media contact experience produced "viewing value" and "effective value" in viewing satisfaction and desire to view the Tokyo Paralympic Games depending on whether or not the individual had media contact experience. Furthermore, in regard to reasons for viewing the games based on the impact of "viewing capability" derived from educational experience and media contact experience, the study indicated that both sports factors and welfare factors produced "effective value" in enhancing the desire to view disability sports and the desire to watch the Tokyo Paralympic Games.

Finally, in regard to "viewing capability" derived from viewing experience of the Olympic and Paralympic Games, the study indicated that the less viewing experience an individual had, the more "viewing value" and "effective value" were generated in terms of level of satisfaction in viewing the games and enhancement in desire to view disability sports. Furthermore, in regard to "viewing capability" derived from the number of viewing experiences, the study indicated that the lower a spectator's "viewing capability" was, the more the "viewing value" and "effective value" increased.